

令和4年度「学生ボランティア団体活動体験レポート」優秀レポート一覧

【優秀レポート】 13件

(応募順)

| 番号 | 大学名               | 氏 名    | タ イ ト ル                              | 活動分野                                                | 所属ボランティア<br>団体名                          |
|----|-------------------|--------|--------------------------------------|-----------------------------------------------------|------------------------------------------|
| 1  | 長崎大学              | 藤吉 加菜  | 有機農業を通じた地域・環境への貢献                    | 環境<br>地域連携(交流)                                      | 農楽部                                      |
| 2  | 天理大学              | 馬場 美咲  | コロナ禍によって生まれた新しい支援の形                  | 福祉                                                  | ボランティアサークル<br>マンモス                       |
| 3  | 明星大学              | 藤田 真帆  | 今だからこそ私たちにできる活動を                     | 福祉<br>地域連携(交流)                                      | 明星大学文化会<br>教育研究部                         |
| 4  | 静岡県立大学            | 野田 栞那  | 子どもたちが教えてくれたこと                       | 地域連携(交流)                                            | 静岡県立大学公<br>認クラブリトルワ<br>ールドキャンプ実行<br>委員会  |
| 5  | 東京外国語大学           | 紺谷 有紀  | フィリピンでの教室建設 *                        | 国際交流(途上<br>国支援)                                     | 学生NGOALPHA                               |
| 6  | 法政大学              | 長尾 美紅  | 積極的なオンライン活動での成果と今後の展望                | 福祉<br>環境<br>地域連携(交流)                                | 法政大学ボラン<br>ティアセンター学<br>生スタッフ VSP         |
| 7  | 摂南大学              | 富岡 まりあ | コロナ禍の大学生による社会奉仕活動を通して                | 地域連携(交流)<br>その他(青少年<br>育成活動)                        | 摂南大学ボラン<br>ティア・スタッフズ                     |
| 8  | 広島女学院大学           | 西 結香   | 海の環境保全活動を通じた地域社会とのつながり               | 環境<br>地域連携(交流)                                      | HJU SAVE THE<br>SEAプロジェクト                |
| 9  | 弘前医療福祉大<br>学短期大学部 | 遠藤 匠   | メディアでは伝わらない災害現場の空気 *                 | 地域連携(交流)<br>被災地支援<br>その他(心肺蘇生<br>法・応急手当法普及<br>啓発活動) | 救急救命研究会                                  |
| 10 | 名桜大学              | 石川 淳貴  | 地域での健康支援活動を通しての成長ー地域に学び、<br>地域を創るー * | 地域連携(交流)                                            | VAG (The<br>Volunteer Activity<br>Group) |
| 11 | 関西大学              | 中村 泰地  | これからの児童文化研究サークル                      | その他(学童保<br>育)                                       | 関西大学同好会<br>児童文化研究<br>サークル「あかと<br>んぼ」     |
| 12 | 上智大学              | 壽 野愛   | 日本とカンボジアの架け橋                         | 国際交流(途上<br>国支援)                                     | STPカンボジア                                 |
| 13 | 一橋大学              | 岩切 龍聖  | 地域をつなぐ動力としての学生 *                     | 福祉<br>環境<br>地域連携(交流)                                | 国立あかるくらぶ                                 |

\*を付したものは特に優れたレポート(以下に掲載)

## 「学生ボランティア団体活動体験レポート」

|                |              |
|----------------|--------------|
| 大学名            | 東京外国語大学      |
| 団体名            | 学生 NGO ALPHA |
| 作成者（所属学部学科・氏名） | 国際日本学部 紺谷有紀  |

タイトル：フィリピンでの教室建設

私たち学生 NGO ALPHA は吉祥寺を中心にフィリピンへの教育支援活動を行っている大学生中心の団体です。2022 年 9 月現在約 50 名のメンバーが活動しています。今夏、メンバー 27 名で 15 日間の日程でフィリピンに渡航し、首都のマニラから飛行機で約 1 時間のパナイ島イロイロ州にあるブントクという田舎の村で 2 つの校舎（小学校）を建設してきました。

ALPHA は一人でも多くの子供の役に立ち、子供たちが十分な教育を受けることができる環境づくりをすることを目標にフィリピンで 2010 年から合計で 18 の校舎を建設してきました。今回フィリピンの現在の教育事情を現地の学校の先生に聞く機会がありました。その先生の話では、多くの村では教室が足りず午前か午後のどちらかしか授業が受けられなかったり、近くに学校がないため親が遠くの学校までの送迎で仕事に時間が割けなかったりしているとのことでした。もし子供達が十分な教育を受けられて、親も送迎の移動に使う時間を就労に使い移動費が節約でき貯蓄できると、高校、大学への進学が見えてきます。ALPHA の活動は学校建設という目に見える支援だけでなく、子供たちの未来の可能性を広げ、国の豊かさにも貢献できているのではないかと気づいたきっかけでした。

ALPHA は設立以来毎年フィリピンで校舎を建設してきましたが、コロナ禍の影響で渡航して建設ができない時期もありました。その間もフィリピンの子供たちに必要な支援を模索し、継続して物資支援を続けてきました。

まず、コロナ禍での活動についてです。フィリピンではコロナ禍が始まってから今年の 8 月まで約 2 年半、対面授業が再開されていませんでした。その長期休校の間プリントを使って未修の範囲を勉強している状況で大量のプリントが必要ということを知りました。そこで私たちは様々な企業に協賛をお願いし、10 台のプリンターを学校に寄付することができました。そして今回渡航した時にそのプリンターが実際に使われて子供達の教育に生かされているのを見たり、先生方からとても助かっていると話をお聞きしたりしてとても感動しました。この様子や現地の皆さまの感謝の気持ちを寄付してくださった企業の方々にぜひ伝えたいと思っています。

次は、活動を支える支援金についてです。私たちが渡航する費用は自費ですが、校舎を一棟建設するために必要な約 60 万円は募金活動を行ったりイベントに参加し LOOB（ALPHA の学校建設を支援してくださっているフィリピンの NGO）製品を販売したりするなどの販売収益で集めてきました。しかし、コロナ禍になってからは街頭募金やクラウドファンディングなどの活動が思うようにできなくなってしまい、支援金がなかなか集まらなくなりました。そして 2022 年の 6 月にやっと開催されたイベントのフィリピン EXPO に参加することができました。上野公園で開催されたフィリピンに関わる様々な団体の出店や行事で、私たちは LOOB 製品の販売を行いました。ここでの募金は 10 万円集まるなどとても大きな収入源となりました。多くの ALPHA のメンバーも対面でのイベントにチームとして初めての参加で結束力を高めることに繋がりました。そして何よりもイベントに参加していた色々なボランティア団体やフィリピンの方と交流することができました。コロナ禍で相手の顔が見えず、自分たちの活動が本当に役に立っているのかわからないこともありましたが、このイベントに参加したことでたくさんの方から応援の言葉を頂

いたり、多くの募金をしてもらったりして潜在的な寄付者と ALPHA やフィリピンの子供たちをつなぐ機会を作れたと思っています。(写真1) その後もオンライン募金や街頭募金をして支援金を集め、2022 年 8 月には、校舎 2 棟を建設できる資金が集まりました。(写真 2)

次に今夏のフィリピンでの学校建設の活動についてです。

コロナの感染状況を慎重に鑑みて 2022 年 8 月 20 日～9 月 3 日の 15 日間、ALPHA として 3 年ぶりに渡航することができました。経由地のマニラでは多くのストリートチルドレンを見ました。生きていくのに精一杯な子供達が大人達に追い払われている光景を見て、フィリピンの子供たちを支援しに渡航してきたのにこの子達をみんな直接助けてあげられないというもどかしさで胸が痛んだ出来事でした。その後、学校建設地のブントク村に着き、ホームステイをしながら現地の大工さんと現地 NGO LOOB と協力して建設作業に取り組みました。建設作業は、日本とは違いほとんどすべての作業を機械を使わずに手作業で進めます。カンカン照りの太陽の下、突然降るスコールとも戦いながら行う作業はとても大変なものです。村の方々の協力やメンバーの頑張っている姿を見るととても励みになりました。また子供たちも授業が終わり休みの時にはとても積極的にお手伝いをしてきて精神的にもすごく助けられました。根気のいる大変な作業やわからないことも多く苦労しましたがみんなで励まし合って無事に校舎を 2 棟完成させたときは何とも言えない充実感を感じることができました。(写真 3・4・5)

生活の面では日本では考えられないようなことが多くありました。例えば、洗濯はすべて手洗いでやります。他にもお風呂は雨水しかありません。水風呂で体を洗い流します。水もとても貴重で少なくなると煮沸消毒してから飲むことになります。今日本に帰ってきて日本がどれだけ便利で安全であるかを身に染みて感じました。私たちがホームステイをした家庭は日本に比べると貧しい生活をしていますが、生活をしていて彼らが不幸だということは一切感じませんでした。どの家庭も親戚や友人と協力しながら幸せそうに暮らしています。豊かさは物の豊かさや便利さではなく、自然や周りの人々に感謝の気持ちを持って生きていくことで感じられるのだと気づかされました。

次に、支援の継続の大切さについてです。一つ目に、ホームステイ先のいくつかの家庭では以前の ALPHA メンバーがホームステイをしていた家庭があり、昔の思い出話を聞いたりそのメンバーとテレビ電話をつないだりして交流を持つことができました。こうやって何年たっても交流が続けられるのは ALPHA が継続して支援活動をしているからだということと、現地の家庭も ALPHA メンバーを受け入れ続けてくれているからと実感しました。

二つ目に、建設が休みの時に以前の支援先のブグハナンという村を訪れました。ここでは 2014 年から 6 年ほどかけ ALPHA メンバーが建設してきた 9 つの校舎がありました。先輩たちが建てた校舎で勉強する子供たちを見て、多くの方々の支援が子供たちに生かされている、自分たちも今建設している校舎でいずれ子供たちの笑顔を作っていけるのかもしれないと心が震え、ALPHA の歴史の尊さや支援を継続することの価値をも実感することができました。

最後に現在の課題とこれからのビジョンについてです。現地の先生方に日本から持ってきた本やチョークなどを渡して、困っていることについて聞く機会がありました。(写真 6) コロナ禍で 2 年半ぶりに授業が始まり、中学生が掛け算を初めて習うなど授業が遅れていること、本がなくて困っていてこれからの目標として図書館を建てて休み時間に生徒が集まって学べる場所を作りたいというお話でした。このお話に触れ、私たち ALPHA は継続して活動し、フィリピンの子供達の学びをより身近なものにしたい、と強く思い帰国の途に就きました。次は来年の 3 月に渡航する予定で、今回の経験や反省を活かしてより良いものにしていきたいと思います。



活動体験レポート 添付資料

(写真 1) フィリピン EXPO 2022/6/18



(写真 2) 街頭募金 2022/6/18



(写真 3) 建設活動 2022/8/20~9/3



(写真 4) 建設活動 2022/8/20~9/3



(写真 5) 建設活動 2022/8/20~9/3



(写真 6) 物資支援・現地調査 2022/8/20~9/3





## 「学生ボランティア団体活動体験レポート」

|                |               |
|----------------|---------------|
| 大学名            | 弘前医療福祉大学短期大学部 |
| 団体名            | 救急救命研究会       |
| 作成者（所属学部学科・氏名） | 救急救命学科 遠藤匠    |

タイトル：メディアでは伝わらない災害現場の空気

私たち救急救命研究会は、救急救命学科の有志の学生が集い構成されている。救急救命処置技術の向上を目指す学内活動の他、学外活動にも積極的に取り組んでいる。心肺蘇生法の普及・啓発活動や災害復旧ボランティア活動、マラソン救護支援活動、通学路除雪ボランティア活動など専門性を活かした活動から地域性のある活動まで幅広く取り組んでいる。ボランティアとは、他人や社会のために自ら行う活動のことで、「他人を思いやる気持ち」は我々の大学の建学の精神である“ホスピタリティー精神”に通ずるものがある。前述の通り、我々は数多くのボランティア活動に参加している。団体に直接依頼をいただくことも多く、設立から7年目と歴史の浅い団体にも関わらず地域の方から少しずつ信頼を得られていると感じる。

近年我が国では自然災害が頻発している。比較的災害が少ないとされている青森県においても令和3年9月に弘前市で観測史上最大降雨記録を更新し、令和4年8月には線状降水帯の発生により県内各地に甚大な被害をもたらした。青森県の特産品である“りんご”も令和4年8月豪雨により被害を受け、その被害額は約20億円にも及ぶ。発災後、弘前市では直ちにボランティアセンターが開設し、ボランティア人材の募集が開始された。被災したりんご園の様子はテレビや新聞などのメディアを通して全国へ発信され、私達学生もそれを何度も目にしていた。550haと広大なりんご園が水没している様子や、川から流れてきたゴミが散乱している様子、被害状況はある程度把握しているつもりであった。しかし、それは被害全貌の氷山の一角に過ぎなかった。

令和4年8月8日(月)、救急救命研究会27名がりんご畑災害復旧ボランティアに参加した。我々の団体は、過去に令和元年台風19号の被害を受けた宮城県丸森町に災害復旧ボランティアへ出向いた記録はあるが、現在のメンバーで災害復旧ボランティアの経験がある学生はいない。初めて自分の目で災害現場を目にする学生がほとんどであった。当日はりんご園近くの公民館に集合し、被災された農家の方と合流後に現場へ向かった。りんご園に入ると、そこには異様な光景が広がっていた。収穫目前のこの時期、鮮やかな緑色の葉の中に大きく成長したりんごが実っているはずが、川の泥を巻き上げながら水没したりんご園は辺り一面茶色に染まっていた。2m近く水没したりんごの木を見上げると、上から約50cmは緑色の葉が残っている。足元には泥が蓄積し、川から流れてきたであろう流木や石が散乱しているほか、アスファルトの一部がめくれ上がっている様子は水の威力を物語っていた。農家の方は「毎日、朝から畑に来て手塩にかけて育てたのに今年は収穫できないね。自然が相手だからしょうがない。来年は収穫できるように頑張ろう」と言葉を口にした。私たち消費者は、店頭で食材が並んでいることが当たり前だと思い込んでしまっているのではないだろうか。生産者の声の重みは今後も忘れることは無いだろう。同じ地域の大学に通う学生として、農家の方の力になりたいという想いが一層強くなりこの日の活動を終えた。この日以降のボランティアについては、自分の都

合が合う日に各自が申し込みを行った上で参加する方針となった。

時間と共に変化するりんご園の様子。写真からは視覚による情報しか得ることができないが、水没から2週間が経とうとしている現場はりんごが腐り、少し酸味があった臭いに包まれていた。りんごの木に絡まった枯草や、葉に付いたまま乾燥した泥を落とすために木を揺らすとボトボトと音を立ててりんごが落ちていく。大切に育てられ、今頃収穫されて消費者の手元に届いていたはずのりんごを地面に落とし、それを拾って廃棄する作業に心苦しさを覚えた。水没による影響で木の疫病や腐敗から来年も収穫できる保証は無いという。しかし、来年こそ消費者の元にりんごを届けるべく動き始めている。私たちは農家の方の力になりたいという想いでボランティアに参加していたが、挫折から前を向いて動き始めている農家の方の姿から、可能性を信じて行動に移すことの大切さを学ぶことができた。

本レポートのテーマに”メディアでは伝わらない”という言葉があるが、決してメディアを批判しているわけではない。むしろメディアを通して災害現場の状況を報道することで自身の住む地域の情報収集や、被災地外からの支援にも繋がると考えられる。しかし、現場の空気感や臭い、農家の方と直接会話をする中での情報など実際に足を運ばないと分からない部分を多く感じることもできた。そして私たちは、五感を使ってボランティアに取り組むことができ、メディア情報と現地には少なからずギャップがあることを感じた。

今回のボランティアを通して課題を見つけることができた。我々は令和4年8月豪雨で被災した弘前市のりんご園に対してボランティア活動を実施したが、被害を受けた地域は県内各地に複数カ所存在している。特に鱒ヶ沢町の被害は大きく報道されていた。住宅の床上浸水や道路の崩壊などライフラインに影響を及ぼす被害が発生し、多くの人手を要する状況であったが弘前市外でのボランティア活動に参加できなかった。この時期は大学の前期考査試験と重複していたため人数の確保が難しい状況であったためである。しかし、災害時には“自助”“共助”“公助”のうち前者2つが大切な役割となる。困っている人がいたら助けるというボランティアの本質を再確認し、団体全体で共有することや災害について知る機会を設けることが課題解決への糸口であると考えた。

救急救命学科の学生のほとんどは卒業後県内外の消防機関に就職し、地方公務員として住民の安全を守る職務にあたる。消防機関は災害現場で活動することから、りんご畑災害復旧ボランティアは消防職員としての将来像をイメージすることや防災士資格を取得した学生にとっては、学んだことを活かす実践の場にもなった。

“災害現場”というこれまでに経験したことのない状況で得たことを活かし、今後もボランティア活動に取り組み、救急救命研究会が学生と地域の双方にとってメリットを生み出す団体となるよう次の世代に引き継いでいきたい。

「令和4年8月豪雨によって被災された方に心からお見舞い申し上げますとともに、被災された地域の日も早い復興をお祈りいたします。」



# 「学生ボランティア団体活動体験レポート」

|                |                                    |
|----------------|------------------------------------|
| 大学名            | 名桜大学                               |
| 団体名            | The Volunteer Activity Group (VAG) |
| 作成者（所属学部学科・氏名） | 人間健康学部看護学科・石川淳貴                    |

タイトル：地域での健康支援活動を通しての成長-地域に学び、地域を創る-

私が所属する The Volunteer Activity Group (以下 VAG)は、2009 年 11 月に発足し、1～4 年次の多くの学生が入会し、健康支援活動等を行っている団体である。VAG は、学生が中心となって活動しており、2022 年 9 月末時点で、10 チームで活動している（図 1）。9 チームが健康支援活動を行っており、地域住民対象が 6 チーム（2 チームはコロナ禍で自粛中）、企業の職員等対象が 2 チーム、生活困窮者（日雇い労働者含む）対象が 1 チームである。健康チェックの内容としては、バイタルサイン・骨密度（または骨ウェーブ）・体組成・ロコモ度・血管年齢・ヘモグロビン値・握力測定などを行っている。そして、1 チームは経済的孤立や発達障害などを背景に居場所がなくなってしまうように、親子を対象とした居場所づくりを行ってきた。2020 年以降は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、一時、すべての活動の自粛が余儀なくされた。感染者数が急増している時期には地域での活動ができないため、ボランティア団体としてできることはないかをリーダー会で話し合った。月に 1 回開催したリーダー会では、①教員のアドバイスを貰いながらではあるが、学生が主体となって感染対策マニュアルを作成、②活動の振り返りを行うことで活動を評価し次回の活動に生かすという PDCA サイクルを構築する、③新入生を対象とした学習会の企画（Study VAG）、④地域の方が VAG の活動について情報を入手できるようなチラシ作成等を行った。2022 年に入りワクチン接種等が進んできた現在は、感染対策の徹底や参加人数の制限など様々な工夫を行いながら一部の活動を継続している。これまで学んできた知識や技術を活用して VAG の活動を行う中で、実際に対象者への支援を行う実践力を身につけることや、私自身の課題を発見することができたと感じている。特に印象に残っている 2 事例の体験について述べる。

1 つ目に骨密度の測定結果から骨粗鬆症傾向にあった 70 代女性 A 氏に対して健康指導を行ったときの事例が挙げられる。骨密度は定期的に測定項目としており、参加者の方は自分の骨の状態について期待や不安などを抱きながら測定に参加している。A 氏も他の参加者と同様に、自分の骨の状態がどうなっているのか気になっている方であった。測定後の結果説明では、同年代の方のデータと比較しても骨密度が低く、骨粗鬆症傾向という測定結果をお伝えした。また、日常生活の様子や何か困っていることはないか話を聞いてみたところ、日頃から運動はしないこと、膝が痛くて外出することが減ったこと、料理は毎日していること等がわかってきた。A 氏は健康でありたいとの思いから、現状が悪化しないことを望んでいた。そこで、私は講義で習ったことを踏まえ、カルシウムが多く含まれている食品などの摂取や適度に日光を浴びることを促した。運動面においては、運動不足がみられたため運動を促したかったが、膝が痛いとのことで、気軽にウォーキングしてくださいと伝えることができない状況であった。そのため、どのような運動なら A 氏が無理することなく気軽に運動をすることができるのかについて、一緒に話をしながら考えることを行った。私としては、適切な説明ができたと感じていた。しかし、A 氏から実際にどのくらいの量を 1 日に摂取すれば良いのか、何かおすす

めの料理はあるのか等の質問があり、A氏にとって満足のいく内容ではなかったことがうかがえた。このとき初めて、講義で学んだ内容をそのまま伝えても対象者が十分に理解できるとは限らないことから、対象者に合わせた健康指導やアドバイスをすることの難しさを感じた。この体験を通して、住民の方が日常生活において何に困っているのか、どんなことに意識して生活しているのか等を知り、講義で学んだ内容だけでは参加者の生活に合った健康指導ができないことを学んだ。その後は、調べ学習を行うときには様々な事例を想定して多面的な視点で内容を深めるように意識するようになった。また、普段から地域に出向いて多くの住民の方と関わることで、知識不足や技術不足が見えてくるため自身の課題と向き合うきっかけとなり、私たち学生にとって大切な学びの場になっていると感じた。

2つ目に、企業の職員を対象に行なっている活動での事例がある。この活動への参加者は、地域に住んでいる住民という面と企業で働く社員という2つの面を持っており、その両方にアプローチして健康支援活動を行う必要がある。私がこの活動へ参加し初めの頃は、緊張してうまくコミュニケーションを取ることができず、測定するだけで精一杯であった。しかし、参加者は健康意識が高く親しみやすい方が多かったため、回数を重ねるごとに顔を覚えてもらいコミュニケーションが取れるようになっていった。私はこの活動のリーダーも務めていることから測定後の健康相談コーナーを担当することが多く、日常生活の様子を聞いたり仕事でのストレスを聞いたり等、参加者それぞれの健康に影響する要因を知り、そこからどのように改善するかを一緒に見つけることができるようになった。健康相談コーナーの担当を初めた頃は、生活改善などのアドバイスを行ってもなかなか行動変容にはつながらなかったが、信頼関係が築かれていくうちに対象者の行動の癖や考え方が分かるようになり、そこを意識して関わることで参加者の反応が変わっていくことを実感した。また、長期的に参加者のデータを見ると、目標体重に近づいている方や血圧が安定してきている方など、参加者の健康状態が良くなっていることが実感できた。私の介入によって参加者の行動変容につながった今回の体験を通して、信頼関係を構築し相手の立場になって物事を考えることで、対象者のニーズにあった支援につながることを学んだ。

コロナ禍で活動の自粛や行動制限が継続されているが、感染対策を徹底することで、地域に出向いて健康支援活動を行えることは、私に限らず学生にとって有意義なものであると考える。VAGの活動は、地域でボランティアとして活動することで、地域との関わり地域住民の健康の特徴を知ることができ、それをどのように改善していく必要があるのかなど、座学では体験できない経験ができるため学生にとって有意義な活動である。また、住民にとっても健康に対する意識の向上や、地域の人と交流するきっかけにつながっている。このことから、各地域での健康支援活動は住民同士の交流の場として活用してもらったり、自分の健康状態を知るきっかけになっているといえる。住民が知識を受け取るだけでなく、住民からも学生でもできる料理を教えていただいたり、沖縄の文化や歴史を教えてくださいと、住民・学生相互に充実した時間を送っており、学生が成長できる場であると同時に、地域住民の健康支援・交流等ができるという点で、学生・地域住民の双方にとって重要な意義を持っている。未だ、活動できていないチームもあるが、活動できる範囲でこれからも活動を続けていきたい。

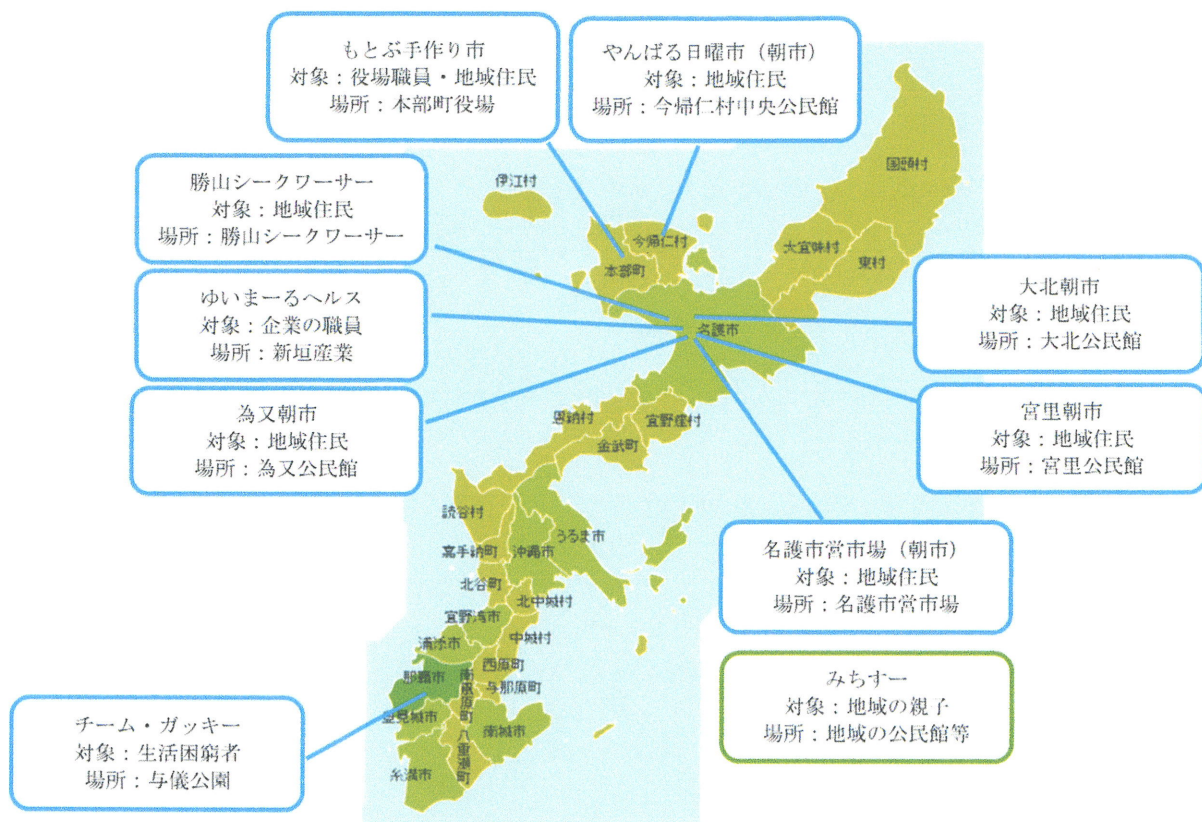


図 1. 活動場所



### 「学生ボランティア団体活動体験レポート」

|                |           |
|----------------|-----------|
| 大学名            | 一橋大学      |
| 団体名            | 国立あかるくらぶ  |
| 作成者（所属学部学科・氏名） | 社会学部・岩切龍聖 |

タイトル：地域をつなぐ動力としての学生

ボランティア活動を通して、私として、サークルとしてできたことは2つあります。

1つは地域の中で学生の役割を見出し、一定その役割を果たす仕組みづくりに貢献できたことです。現状、地域の中でボランティア活動を担っているのは若年層ではなく中高年層です。しかし、その担い手たちが昨今では高齢化し、だんだんと担い手たちが不足していきました。それにともなって、これまで彼らが担ってきた役割を担う人がいなくなり、地域の中で身体的に不自由な方や高齢者の方々が助けを求めづらくなっていると思います。私たちが取り組むちいきエナジーという活動や公立学校でのボランティア活動などは、そうした中高年のボランティア活動者たちが地域の見えないところで果たしてきた役割を、私たち学生が補完する取り組みです。地域コミュニティが希薄化し、地域内の共助が難しくなっていく中で学生がやるべきことを見つけ出し、その役割を全うすることができました。

もう1つは地域内で世代間交流の機会を多く生み出すのに成功したことです。万が一大地震が発生し地域の避難所で生活することになった場合、赤ちゃんから高齢者まで、障害のあるかたや外国人の方など年齢や属性など様々な人々が一つ屋根の下で生活することになります。周りに家族も友人もいない中で生活することを余儀なくされた場合、もしボランティア活動の中で知り合っていた人がいれば孤立することを免れ、安心して生活することができるのではないのでしょうか。地域にいる多様な属性の人々と良好な関係性を築くことは避難所生活で皆が抱く不安を解消することにつながります。私が生活する地域の現状として学生は大学での交友関係やサークルでのつながりなど学生同士で関係性を構築しており、子供のいる家庭や高齢者はなかなか学生との接点を持つことができていません。保護者や先生たちと協力して小学校での活動を行ったり、高齢者のお困りごとを解決したりすることを通じて、なかなか学生が関わってこなかった領域に足を踏み入れ、学生ボランティアとして地域の世代間交流を促進することに成功しています。

一方、私個人、あるいはサークルとして依然できていないことも2つあります。

1つは地域の方々のお困りごとに十分に対応するだけの学生を動員できていないということです。確かに私たちのサークルは地域の高齢者や子どもの保護者など多様な人々とかかわり、彼らのお困りごとを解決するのに成功しています。しかしながら、学生のボランティアサークルはその数においても規模においてもそう多くはありません。加えて私の大学においては障害を持つ子どもたちや外国から移住してきた人たちを対象としたボランティアを行う団体が多く、私たちのように地域に入り込んでいく団体はごく少数です。地域にはお困りごとを抱えた人たちが多くいるにもかかわらず、そのニーズにこたえるだけの学生をボランティアとして動員することはできていません。

もう1つは民間企業との協力体制が築けていないがゆえに実行に力を入れられていないということです。私たちが活動の中でかかわりを持つ組織は公立学校や市役所などの公的な機関がほとんどで

す。特に市役所は地域の課題を認識し、一定程度その解決に取り組もうとしていますが、十全に実行を行うための動力がないという問題を抱えています。災害に対する備えや高齢者へのボランティア活動などに取り組んではいるものの市役所によるそれはあまり大きなインパクトを残せていないと感じます。こうした実行力の問題を解決するには民間企業の動力を取り込むというのが良いと考えます。社会課題の認識とその解決の構想だけでなく、実際に解決まで行い収益を得ている民間企業はノウハウ面においてもマインド面においても実行の動力を有しているでしょう。ただし、ボランティア活動の特性上金銭的インセンティブを発生させづらいために企業との協力体制を気づくことは難しくなっています。

こうした経験を通じて私は地域への献身が地域への愛着につながるということを学びました。私自身はじめは地域課題を解決しなければならないという義務感でボランティア活動を行ってきました。しかし、そのなかで地域の多くの人たちとかかわり彼らの人間味ある温かさを体感し、大学生活をささげてこの地域でのボランティア活動を行うことが自分の人生においてかけがえのない経験になるということにわくわくするようになりました。表面的な自分の利害だけで考え、学生同士での交流に終始する多くの大学生と同じように生活していたら、地域の人々の人間的な魅力に気づくことはなかったと思います。また、サークルの先輩方が時々地域に戻ってきた際、地域の方々がその方々のことを覚えていて親しく交流している様子を見ると、今ボランティア活動を通じて築いている深い関係性は大学を卒業した後まで続いていくものだということが感じられます。人間的な温かみが希薄化している日本社会においてこうした関係性はかけがえのないものになるのだろうと推察します。

また、地域にはボランティアによって解決できる課題が山積みであるということもボランティア活動の経験の中で強く感じました。地域の中にお困りごとを抱えた人々が多くいます。その解決が円滑に行われることを可能にする体制も整えられていません。また、解決を担う学生や地域のボランティアの人々を確保し動員するような仕組みもできていません。地域の人々の個人的なお困りごと一つをとってもこのように構造的な課題が山積みです。そして、私たちのサークルのように地域の人々の暮らしについて包括的に認識し、活動している団体が少ないことも問題です。こうした問題はなかなか市場原理を使って解決できるような容易なものではありません。地域において貴重な動力である学生が問題を認識し、自ら主体的に取り組んでいく、そしてそうした人たちの輪を拡大していく必要があると思います。

私がまだボランティア活動に取り組んだことのない人に言えることは、2つあります。

1つは、地域において学生という存在はこの上なく貴重であるということです。大学生として生活してはなかなか気づけないですが、健康的で活動的な学生に対して地域の方々が期待していることはとても多いです。あなたの気持ちさえあれば地域の人々は学生の主体的な活動を受け入れてくれると思います。

そしてもう1つは、どんな地域であってもそこでのつながりを大切にし、ボランティアという形で地域やそのつながりの持続に貢献していくということはかけがえのない経験になるということです。上述の通り、ひとたび地域の中に身を投じれば、その人間的な温かみに胸を打つでしょう。そして、地域には課題が山積みです。地域の人々の不自由ない暮らしを実現するためにあなたが行動すれば、もちろん彼らは喜んでくれるし、何より学生時代にそうした活動に取り組んできたということが貴重で誇らしい経験になるでしょう。